

《指導助言》

◎大栗直子（城ノ内高等学校教頭）

つるぎ高校の茅野先生には、県内各校に先駆けて取り組まれている一人一台タブレットを活用した授業実践を、「ICTを活用した国語科授業実践」と題した研究発表にまとめていただき、大変お世話になりました。新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策の実施に伴い、GIGAスクール構想の実現が一層推進される中、どのようにタブレットを活用していくかについては、各授業者にとって喫緊の課題です。今回の発表は、そのような私たちにモデルを提示していただくとともに、示唆を与えていただける、まさに時宜を得た、すばらしい発表でした。日々のお忙しい教育活動の中、研究に取り組んでいただき、本当にありがとうございます。

それでは、今後、私たちが日常的にICT機器を活用した授業を実践していく上で、ぜひとも参考にしたいと思う点について、二点説明いたします。

一点目は、ICT機器の導入時より継続的に生徒アンケートを実施し、それをもとに効果的な授業を構想されているという点です。生徒の実態や意識の変容を把握して検証することは、効果的な教育活動の実践には欠かせません。ICT機器さえ使っていればよいというのではなく、生徒の実態に即した効果的な活用を常に考えていく必要があります。今回の発表では、生徒の意識の変容を踏まえて、国語科として重点的に取り組む言語活動やICTの効果的な活用を考察され、実践されています。その点がすばらしいと考えます。

二点目は、学校の教育目標に沿って、国語科として育成すべき資質・能力を明確にしながら、学習指導要領を適切に踏まえて授業を実践されているという点です。具体的に、「三、『MetamorphicClassRoom』を使った授業実践」の中から二つの実践をピックアップし、学習指導要領を示しながら説明します。

まず、「3『開廷！模擬裁判』」についてですが、この授業は、模擬裁判の台本に従ってロールプレイをし、複数の情報を吟味しながらグループで話し合った後、有罪・無罪に分かれて討論するという展開となっています。現行学習指導要領に照らしてみると、「国語表現」の指導事項イ「相手の立場や異なる考えを尊重して課題を解決するために、論拠の妥当性を判断しながら話し合うこと」の内容を指導するために、言語活動例ア「様々な考え方ができる事柄について、幅広い情報を基に自分の考えをまとめ、発表したり討論したりすること」に基づく言語活動を、模擬裁判という場面を設定して実践しています。タブレットを活用することで、生徒にとっては、複数の資料を簡単に扱うことができ、思考の整理につながることも期待されます。教師にとっても、多くの資料を印刷する必要がなく、業務の効率化を図ることができます。

また、「4『俳句』」は、俳句を読んでイメージした内容を言葉や絵で表現し、全体に説明するという授業ですが、これも「現代文A」の指導事項イ「文章特有の表現を味わったり、語句の用いられ方について理解を深めたりすること」を指導するために、言語活動例ア「文章の調子などを味わいながら音読や朗読をしたり、印象に残った内容や場面について、文章中の表現を根拠にして説明したりすること」に基づく言語活動を実践しています。タ

タブレットを活用することで、生徒は、書き込む内容を加えたり消したりと修正等が簡単にできるので、思考の可視化を図ることができます。また、書き込んだ内容を即時に他者と共有することができるので、話し合いや発表がスムーズに進むとともに、思考の広がりや深まりにつながることが期待できます。

このように、今回の研究発表ではICTの効果的な活用を提示いただいていますが、ICTの活用を授業の目的としているのではなく、現行学習指導要領を適切に踏まえて、目の前の生徒に必要な言語能力の育成に資する授業を実践されています。

加えて、先に挙げた「3『開廷！模擬裁判』」は、新科目「現代の国語」の「思考力、判断力、表現力等」A話すこと・聞くこととの指導事項オ「論点を共有し、考えを広げたり深めたりしながら、話し合いの目的、種類、状況に応じて、表現や進行など話し合いの仕方や結論の出し方を工夫すること」に対応しており、「4『俳句』」も、新科目「言語文化」の授業に応用することが可能です。

現行学習指導要領だけでなく、新学習指導要領にも対応した授業実践であり、このことは、「五、考察」にある「社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばすことにつながった」という分析からもうかがえます。

今回の研究発表を通して、研究者が実感された「ICT機器を用いることで、集団の中で発表することへの抵抗感を弱め、思考し想像する楽しさと表現を工夫する面白さに気づいた」という生徒の変容は、ICT機器の特性を十分に把握したうえで、授業で適切かつ計画的に位置づけてきた、すばらしい成果であると考えます。

次年度には、全ての学校で一人一台タブレットが導入されます。機器及び学習支援サービスの使い方はもちろんのこと、それぞれの特性について、理解を深める必要がありますが、それは、国語科で身に付けさせたい資質・能力を効果的に育成するためです。ICT機器は、ツールに過ぎません。しかし、それをどう活用するかによって、発揮される能力、効果は変わってきます。

各学校においては、まず、学校教育目標に沿った育成すべき生徒像の実現に向け、国語科ではどのような資質・能力を育成するのかを学習指導要領に即して明確にし、学習指導計画を立てるようにしてください。そして、茅野先生の研究発表を参考にしながら、自校にとって効果的なICT機器・学習支援サービスの活用場面を考え、実践してみてください。今回の発表を機に、各学校のICTを活用した授業実践が一層進み、広く共有されることを期待しています。茅野先生、本当にありがとうございました。